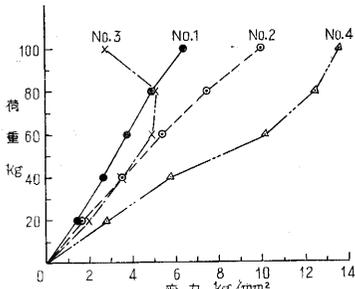
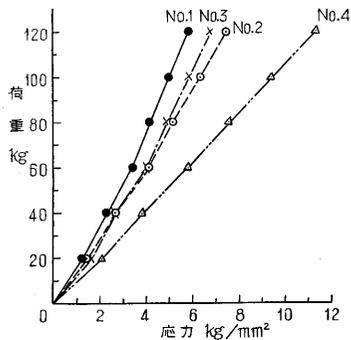


約 10~14 であり、0.8 mm のジュラルミンの翼は 180~215 kg で荷重倍数は約 14~16 でありその強度は十分である。アンテナ付翼と、ない翼との構造上の違いにより後者の方が約 15~30% の強度の増加を示している。剛性の強さの順を示すと 0.5 mm ステンレス板サンド



第11図 128 J-TR 型アンテナ無翼 (表板 0.5 mm ステンレス)

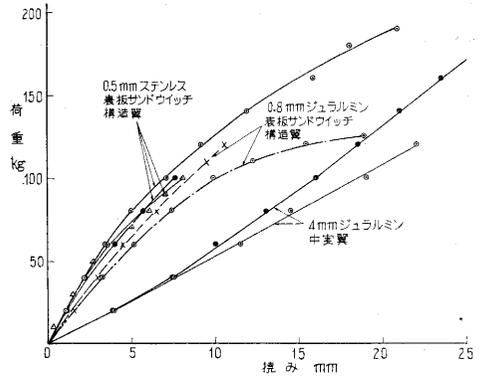


第12図 128 J-TR 型アンテナ無翼 (表板 0.8 mm ジュラルミン) の翼の撓みを記入したものである。撓みは翼の先端で計

ウイッチ構造翼, 0.8 mm 板サンドウイッチ構造翼, ジュラルミン中実翼となっている。また固有振動数を見てもサンドウイッチ構造翼の方が中実翼より一段と優れている。

第3表には荷重 120 kg (荷重倍数約 9.25) を加えた場合の翼の最大応力を示すものでかなりの安全性のあることを示している。第13図には

荷重 200kg 程度までの各種類



第13図 翼の荷重—撓み曲線

りカセットメータを使用した。

4. あとがき

以上主として室内実験的に翼の強度および剛性試験を行った。これでサンドウイッチ構造翼は強さおよび剛性の点ですぐれていることがわかった。特に 128 J-TR 型用のようなアンテナ翼は他の構造法では不可能と思われる。なお、飛しょう実験では翼はエンジンからの加熱により約 170°C 程度になったことが計測されたが、心材および接着剤はこれに十分耐えた。

また以上の結果によれば、実機の翼で最も強度の弱いものは 128 J-S 型の 1 号機の場合で約荷重倍数 5 の強さを持っている。したがって 128 J-S の性能に対してはこの程度の強さおよび剛性で十分であることがわかった。なお、供試翼および実験装置の製作には長谷部秀二君の協力を、また、実験には富田文治、吉屋勲の両君の協力を得たことを付記する。(1957. 2. 4)

観測ロケット研究班 (SR 研究班) の構成

当所内の観測ロケット研究班の主要構成は下記の通りになっている。参考のためにここに掲載する。

教授	星 合 正 治 (所長)	助教授	齋 藤 成 文
"	池 田 健 (幹事)	"	植 村 恒 義
"	高 木 昇 (幹事)	"	勝 田 高 司
"	糸 川 英 夫 (幹事)	"	野 村 民 也
"	沢 井 善 三 郎	"	森 大 吉 郎
"	玉 木 章 夫	"	池 辺 陽
"	橘 藤 雄	"	丹 羽 登
"	平 尾 収	"	宋 岡 清 市
"	丸 安 隆 和	"	富 永 五 郎
"	坪 井 善 勝	"	山 田 嘉 昭
"	福 田 義 民	"	安 藤 良 夫
助教授	浅 原 照 三	"	武 藤 義 一

正 誤 表 (2 月号)

頁	段	行	種別	正	誤
5	右		第 1 図	天地逆	
"	"	7	"	約 100 db	約 120 db
6	"	7	"	…はずである	…はずである
7	"	10	"	130mm	180mm
10	左		第 2 図	KENDARAPARA CANAL	KENDRAPAR CANAL
"	"	28	本 文	50t 船程度	50t 船程度
11	"	6	"	e)	f)
"	"	13	"	f)	g)
20	右	25	"	…の平衡でも	…の平衡でも
"	"	26	"	平衡の場合と	平衡の場合と
23	"	27	"	Function	Functon